

# 野稿一章

——青木周蔵の「遠遊」上書——

森 川 潤

(受付 2016年10月19日)

## はじめに

歐洲留学ノ希望ハ日ヲ逐フテ熾ナルニ至レリ，是ニ於テ予ハ医校ノ先輩竹田祐伯日野宗春等諸氏ニ説クニ，長藩ハ既ニ数名ノ学生ヲ歐洲ニ派遣シタルモ，此輩ハ執レモ兵学研究ヲ目的トスルモノ、如シ，然レトモ国家ノ必要トスル学科豈独リ兵学ノミニ止ランヤ，医学及ヒ衛生学ハ為政上最モ緊要ノ学ナリトノ趣意ヲ縷述シ，併セテ予ヲ歐洲ニ留学セシムヘク斡旋センコトヲ請ヒ，又木戸翁（孝允）ニ説クニ，同一ノ趣旨ヲ以テシ，且歐洲留學差許サルヘク尽力セラレンコトヲ懇ニ依頼シタリ<sup>1)</sup>

青木周蔵は，慶応3（1867）年6月，医学遊学生として長崎にたどりつく。長崎に派遣されたとしても，「歐洲留学」を確約されていたわけではない。討幕運動を先導する萩藩には，医生を海外へ留学させるほどの財政的な余裕はない。「歐洲留学」を実現するためには，萩藩庁にはたらきかけるよう萩藩医団に要請したり，藩政府の中枢に請願したりしなければならない。周蔵は，その間の経緯について，自伝にのせる。

周蔵は，長崎から日野宗春に書簡を書きおく。山口県文書館には，そのうち，慶応3（1867）年6月28日付，同年8月18日付，同年10月12日付，慶応4（1868）年1月9日付のものが所蔵される。宗春は，藩主侍医，好生堂教諭として萩藩の医療行政を統括する青木研蔵を補佐する立場にあり，同時に周蔵の後見人でもある。そのほかに，「上 野稿一章」と表書きされた一綴りの文書ものこされている<sup>2)</sup>。「野稿一章」は，「藩ノ醫員青木恒徳敢テ竊ニ木戸執事ノ足下白ス」という書き出しではじまる海外留学の嘆願書である。文書末尾には，「丁卯季夏」，すなわち慶応3（1867）年の陰暦6月という起草時期，「木戸執事」という宛先，「青木周蔵」と「藤原恒徳」という署名がしるされ，花押もそえられる。「藤原恒徳」という署名や花押は，武士階級の習俗をまねたものである。

若い周蔵には術学のきらいがあり，「野稿一章」には，『論語』，『史記』，李白の五言古詩などの中国の古典が援用されるが，生半可な理解のためか，譬喩としての的確とはいえない。しかも，内容が重複・錯綜し，論理的な飛躍もみられる。書き込みがみられるところから，孝允に送付するための草稿かとおもわれるが，藩政の中枢に参画する木戸孝允に，どのように海外留学の必要性を説いたのか，窺い知ることができる。

鮮割ノ如キハ、粟谷ノ尻ニ非ハ割ス恒德僑居已  
 二月餘未ダ之ヲ見ス故ニ毎歲或ハ唯ニ五人ヲ割  
 或ハ十人ニ過ルヲ有リ癩以テ経験習熟スルニ是  
 吾病院ニ優ル一僅ニ一層ヲ加ルニ且蘭醫亦  
 曰必也遠遊スヘキナリト之ヲ聞キ愈概シ各藩  
 ノ盛ヲ想テ益憤シ或奮然止シ難シ実ニ淳名ヲ  
 釣リ時様ヲ学ノ類ニ非ズ聊滿腔ノ微忠竊ニ執  
 事ノ足下白シ北醫伏テ高断ヲ祈ルニ丁打李婁  
 恒德頌首再拜  
 青木周藏  
 拜呈木戸執事傑軒  
 藤原恒德 五

図1 野稿一章

本稿では、「野稿一章」を中心として、周蔵が長崎から書きおくれた4通の書簡でおぎないながら、周蔵が医生として洋行し、西欧で修学しなければならない理由について、どのように説明しているか検討する。

## I. 吾道ノ墮廢

青木周蔵は、長崎に派遣される経緯について、つぎのようにしるす。

(前略) 積年ノ志願、知己ト雖モ漫リニ之ヲ告ス、獨半井春軒ト其志ヲ同フシ、空シク機會ヲ待ツノ際、今春坪井信道ト語り、談話吾道ノ墮廢セルニ及ベリ時、居常ノ憤懣語氣ニ発スベシ、信道ノ恒徳ヲ待ツ、尔来極テ厚シ、後某日更ニ恒徳ガ志ノ嚮フ所ヲ因テ詳悉之ヲ答ヘ隠ス所ナシ、信道殊ニ喜ビ、竹田祐伯日野宗春等ト謀リ、偶河北義二郎亦之ヲ賛シ、恒徳ヲ官府ニ薦メ笈ヲ崎陽ニ負シム(後略)

周蔵は、「志」をおなじくする半井春軒とともに、その実現の機会をうかがっていた。今春、すなわち慶応3(1867)年春、坪井信道と話したさい、「吾道ノ墮廢」という認識を共有することを知り、信道に「志ノ嚮フ所」を述べた。 「志ノ嚮フ所」は、「積年之宿志」、「積年ノ志願」とも表現されるが、「遠遊」、すなわち海外留学を意味する。信道は、養祖父青木周弼が師事した信道の嫡子、二代目信道である。信道は賛同し、竹田祐伯、日野宗春といった藩医団の中枢部に諮り、周蔵を長崎に遊学させるよう藩政府に進言する。河北義次郎も賛同し、周蔵は「吾道ノ墮廢」を懸念する萩藩医団の期待を背負い、藩費遊学生として長崎におもむく。

「吾道ノ墮廢」とは、萩藩における西洋医学の衰退を意味する。周蔵の養祖父周弼は、江戸蘭学の主流である宇田川玄真と坪井信道のもとで研鑽し、萩藩ではじめての藩内居住の西洋医として藩医に登用される。周弼は、藩医のなかで多数を占める漢方医の執拗な抵抗を受けながら、「漢學を重もにして、チョコチョコ西洋流を入れて追々に蚕食するやうに」<sup>3)</sup>、萩藩医学校の履修課程のなかに西洋医学をとり入れる。それは、萩藩医学校に宇田川・坪井の学統を移植する過程にほかならない。萩藩医学校は、文久3(1863)年1月の好生堂改正規則により原書課程を本科とする西洋医学校に再編成される。原書課程は、オランダ語医書を繙読しなければ、西洋医学の「蘊奥」をうかがいしることができないという考え方にもとづきもうけられたものである。周弼が藩医として医療や教育にたずさわるようになると、オランダ語に習熟する蘭学者もそだち、あたらしい西洋医学を受け入れる態勢もとのっていた。

萩藩医団は、ふたつの点で「吾道ノ墮廢」を認識する。ひとつは、萩藩医団の拠点である好生堂に、西洋医学のあたらしい息吹をふきこむことができなくなった点である。もうひとつは、好生堂が西洋医の養成機関として機能しなくなった点である。

萩藩は、急進的な尊皇攘夷論をかかげ、京都において政局を主導していたが、会津藩、鹿

見島藩などの公武合体派が主導する文久 3（1863）年 8 月 18 日の政変により京都から追放され、元治元（1864）年 7 月の禁門の変により朝敵となり、幕府とも敵対することになる。事変後間もなく、幕府により萩藩にたいする封鎖策が発令される。江戸だけでなく、大坂、長崎などの天領にあった萩藩の土地や建物も接収される。萩藩医学校が西洋医学校に再編されるのと相前後し、萩藩は孤立状態におちいる。

萩藩の人びとは、医学修業のために大坂や江戸におもむいていたが、長崎は医学修業の最終段階におもむく遊学地になる。長崎には、オランダ商館の館員や医師、オランダ通詞が常駐する。安政 4（1857）年に長崎においてオランダ人医官ポンペ（Johannes Lydius Catherinus Pompe van Meerdervoort）による医学伝習がはじまると、萩藩医団の人びとも「直伝習」のために長崎にでむいていた。諸藩の遊学生は、幕府伝習生の松本良順の門生になり、ポンペの授業に参加する。良順が長崎において門生をうけいれはじめた安政 4（1857）年秋から文久 3（1863）年 7 月までに 15 名の防長二州の出身者が良順の門生としてポンペの医学伝習にくわわる。そのなかに、中原玄快、上領道仁、長野昌英、半井春軒の 4 名の「松平大膳太夫臣」、すなわち萩藩医もいた。管見によれば、かれらは周蔵以前に萩藩から長崎にでむき、西洋医学をまなんだ最後の医学遊学生である。幕府によって萩藩封鎖策が実施されると、藩外部との人的・物的な交渉がとだえ、西洋医学の受容拠点である長崎への回路もとざされる。

幕末の動乱のなかで、幕府、諸藩ともに軍制改革にとりくみ、欧米から戦艦や銃砲を輸入し、実戦に配備しようという動きも顕著になる。欧米から輸入される銃砲による創傷に対処するためには、最新の外科学を導入せざるを得ない。文化 12（1815）年には桂川甫周が『海上備要方』を板行し、宇田川玄真も『遠西軍中備要方』を訳述する。これらの訳書は「外科治療や内科に関する蘭方医書の一部」とみなされる<sup>4)</sup>。西洋医学の銃創治療法をはじめで紹介したのは、『銃創瑣言』である。『銃創瑣言』<sup>5)</sup>は、大槻俊斎が「西醫設劉私」の「外科書」と「モスト模斯篤」の「醫事韻府」の「創傷篇」から「銃創部」を摘出し、抄訳したものである。「外科書」の原著は、ドイツ人外科医・眼科医セリウス（Maximilian Joseph von Celius）が 1822 年から翌年にかけて刊行した 2 巻本の“Handbuch der Chirurgie”であるが、11カ国語に翻訳される<sup>6)</sup>。オランダでは、オランダの開業医プール（Gerardus Johannes Pool）がオランダ語に翻訳し、“Leerboek der heekunde”として刊行する。それが、長崎に舶載される。「醫事韻府」の原著は、ドイツ人内科医モスト（Georg Friedrich Most）が著した“Encyclopädie der gesammten medizinischen und chirurgischen Praxis”である。その蘭訳本“Encyclopedisch woordenboek der practische genees-, heel- en verloskunde”が長崎に舶載され、緒方洪庵も部分的に訳述する。

嘉永 2（1849）年 2 月、医学館の漢方医の画策により、幕府は奥・表医師に外科と眼科をのぞき、蘭方、すなわちオランダ系西洋医学による診療を禁じる。同時に、医書の出版は医



学館の許可制になる。葦山代官江川太郎左衛門が幕府に上申書を提出し、『銃創瑣言』は嘉永7（1854）年に刊行される。「銃創」は、「火薬ノ勢力ニ由テ。放射シタル彈丸。鉛片。鐵片。或ハ大小諸種ノ物ヲ體中ニ受テ發スル者ニモ。創傷中ノ最危険ナル者」である。したがって、銃創を治療するためには、「創内ニ在ル所ノ異物ヲ子細ニ探索スルヲ第一療法ト」しなければならない。『銃創瑣言』は、銃創に特化した外科治療法について論じたものである。

『銃創瑣言』とならび、「幕末の軍陣外科の基本的文献」として流布していたのが『斯篤魯黙兇砲痕論』である<sup>7)</sup>。『斯篤魯黙兇砲痕論』は、佐倉順天堂の創始者佐藤泰然の養子尚中がオランダ語医書を翻訳し、刊行したものである。尚中は、万延元（1860）年末に長崎におもむき、精得館のポンペのもとで研鑽する。オランダ海軍二等軍医ポンペは、「外科醫方」を教授するさいには「ストロマイエルの外科書」を種本として活用する<sup>8)</sup>。「ストロマイエル」、すなわちドイツ人外科医・眼科医シュトロマイヤー（Georg Friedrich Louis Stromeyer）<sup>9)</sup>は、1804年3月、ハノーバーに生まれ、ゲッティンゲン大学、ベルリン大学にまなぶ。ベルリン大学では、医学博士の学位（doctor medicinae）を取得する。ウィーン、パリ、ロンドンに留学し、1838年にエアランゲン大学教授になり、その後、1841年ミュンヘン大学、1842年フライブルク大学、1848年キール大学の教授を歴任する。キール大学時代の従軍経験について、シュトロマイヤーはつぎのように述べる<sup>10)</sup>。

千八百四十九年吾國セ子マルカ國と確執起り予醫長奉りてスレースエーキホルステインの軍隊に在て野戦に赴き親しく二千餘の創者を療せしに皆奇異の變症を生して全く尋常の創痕に異なりしなり

1849（嘉永3）年、シュレスヴィヒ・ホルシュタインの帰属をめぐり、プロイセンとデンマークのあいだに戦端がひらかれる。シュトロマイヤーは、「醫長」としてシュレスヴィヒ・ホルシュタイン軍に従軍し、2000名あまりの創傷兵を治療する。創傷兵の「創痕」に「奇異の變症」が生じていることに衝撃をおぼえ、“Maximen der Kriegsheilkunst”（軍陣医術の精華）をまとめる。同書は、1855（安政2）年にドイツのハノーヴァーで刊行され、英語にも訳され、各国にひろまる。オランダ人「シュエルマン」（Bernardus Franciscus Suerman）によってオランダ語に訳され、“Grond der Militaire genees- en heelkunde”<sup>11)</sup>として長崎にも舶載される。シュトロマイヤーは、“Handbuch der Chirurgie”という外科書も刊行する。“Handbuch der Chirurgie”も「シュエルマン」によってオランダ語版“Handboek der heelkunde”と題して出版される。

尚中は、文久2（1862）年1月、1年あまりの遊学をおえ、長崎をあとにする。長崎をたびだつさい、ポンペから“Handboek der heelkunde”を餞別としておくられる<sup>12)</sup>。“Grond der Militaire genees- en heelkunde”も、そのとき長崎から持ちかえたものであろう。尚

中は、佐倉順天堂においてシュトロマイヤーの「外科書」を会読のためのテキストとしてもちいる。

尚中は、“Grond der Militaire genees- en heekunde”の一部を翻訳し、慶応元（1865）年5月、『斯篤魯黙児砲痕論』として板行する<sup>13)</sup>。長崎からもちかえったオランダ語医学書の訳本は、動乱のなかで全国に流布する。萩藩でも、尚中が訳述した『斯篤魯黙児砲痕論』が閲読される<sup>14)</sup>。訳書が藩内に漂着することはあったとしても、オランダ人医官により戦傷学が講じられた<sup>15)</sup>としても、翻訳主義と原典主義にもとづく萩藩医学校に西洋医学の新鮮な息吹がもたらされることはない。なお、尚中は、“Handoek der heekunde”を翻訳し、同年11月に『外科医法』として板行する。

萩藩医団は、好生堂が西洋医の養成機関として機能しなくなったことに懸念をもつ。好生堂は、藩主、その一族、家臣団の診療にたずさわる萩藩医団の拠点であり、西洋医の養成機関の側面だけでなく、医業登録所、種痘の実施本部の役割をにない、萩藩の医療行政の中核としての側面をあわせもつ。萩藩は、文久3（1863）年5月の攘夷実行をひかえ、下関に赤間関病院を設置する。この軍事病院は、好生堂の管轄下におかれ、好生堂から医員が派遣されただけでなく、機器類も好生堂からもちこまれる<sup>16)</sup>。同年11月には萩藩医にたいし「毎日軍用中の療法講究のために」好生堂にでむくよう命じられる<sup>17)</sup>。翌月には、戦闘員の負傷の増大にともない、鍼科や口中科を専門とする藩医にも外科医術を兼修するよう命じられる<sup>18)</sup>。周蔵の養父研蔵は、萩藩征討の命がくだされた2ヶ月のちの元治元（1864）年9月、『軍中備要』を訳述したといわれる<sup>19)</sup>。実際には、研蔵の門人であり、養子の候補であった福田正二が編訳する。前掲の『斯篤魯黙児砲痕論』と同様に、シュトロマイヤーが著した“Maximen der Kriegsheilkunst”のオランダ語訳から、原著の“Wunden duruch Kriegswaffen”（兵器による創痕）の部分の訳出したものである<sup>20)</sup>。外科研修のテキストとして使用されたのであろうか。

元治2（1865）年1月には、下関砲撃事件、禁門の変、萩藩内での内戦における傷病兵や罹患者の治療のために好生堂に病院が付設される<sup>21)</sup>。改元後の慶応元（1865）年4月には、諸隊付属の病院が廃止され、山口、高森、吉田に軍事病院が常置される<sup>22)</sup>。好生堂の教授スタッフだけでなく、医生までも軍事病院にかりだされる。好生堂入学後わずか1年しかたっていない周蔵も、元治2（1865）年3月に「好生堂病院御用掛り」としてかりだされる<sup>23)</sup>。好生堂は、西洋医の養成機能を放棄せざるを得なくなる。

## II. 蘭醫ノ教授スル病院

周蔵は、戊辰戦争の勃発により長崎奉行が長崎を放棄し、新政府により精得館が再開される慶応4（1868）年春までは、精得館に出入りすることはなかった。周蔵が長崎で書き記し

たものには、精得館に出入りしていたような記述がみられるが、それは長崎の西洋医学の「講習」を受けた長与専斎やその門生などから伝聞した事柄を記したにすぎない。周蔵は、長崎精得館の実情について述べる。

崎陽ハ蛮客渡来病院ハ蘭醫ノ教授スル所、而シノ此事件ヲ白セハ足ルヲ不和者ト謂フト雖、院ノ風習伎倆ヲ主トノ讀書ヲ疎ンス、然レ患者ノ在局者居常二十輩ニ上ラス、人身解剖ノ如キハ蛮客ノ屍ニ非レハ割ズ、恒徳僑居已ニ月餘未タ之ヲ見ズ、故ニ毎歳或ハ唯ニ五人ヲ割キ、或ハ十人ニ過ルヲ有リト雖レ以テ経験スルニ足ズ、吾病院ニ優ルヲ僅ニ一層ヲ加ルノミ

第1に、周蔵は医学校の授業に言及する。精得館は、医学校（医学所）と病院（養生所）からなる。「院ノ風習」は「伎倆」を重視し、「讀書」を軽視する。周蔵は、萩の好生堂では、原書課程に編入され、すでに「文法書習讀」から「窮理書研究」にすすみ、「三科之醫學」の「第一科」の基礎医学課程にすすんでいた。「讀書」とは、オランダ語原書を繙読することである。周蔵は、萩藩医学校では、オランダ語原書を繙読し、西洋医学の「蘊奥」をうかがいしるためにオランダ語を習得する。周蔵が長崎に派遣されたのは、「讀書」の能力を評価されたからである。原典主義と翻訳主義の洗礼をうけた周蔵にとっては、精得館での授業は異質なものである。

周蔵は、出崎以来、松岡勇記とともに大村藩医の長与専斎のもとにかよう。専斎は、日中は精得館にかよい、「講義の傍聴」と「病院診察の傍観」にあけくれる。帰宅後は「伴い來れる人々」や「他の知友など」、すなわち周蔵などに「講習」をおこなっていた<sup>24)</sup>。専斎は、安政元（1854）年6月に大坂の緒方洪庵の適塾に入門し、安政5（1858）年の春には塾頭に推挙されるほどにオランダ語に習熟していた。緒方塾では、「リセランドの序文が読めると、すぐに塾頭になれる資格のあつたものじやそうだ」といわれる<sup>25)</sup>。洪庵は、坪井信道塾以来、「リセランド原生」、すなわちフランス人外科医リシュラン（Anthelme Balthasar Richerand）が著した“Nouveaux élémens de physiologie”（『新生理学入門』）のオランダ語版“Nieuwe grondbeginselen der natuurkunde van den mensch”を閲読し、『病学通論』を著述するさいにも参看する。

専斎は、原典主義と翻訳主義の申し子ともいべき蘭学者である。専斎は、適塾においてオランダ語の文法と文章論を習得したうえで、『ズーフ・ハルマ』などの字書をたよりに難解な蘭書を繙読する。蘭書を繙読するさいには、「文字章句の穿鑿」にふけったり、「病症藥物器具」、「その他種々の名物記號」などの未知のものについて詮索し、いたずらに日月を費消したりすることもあった。

専斎は、万延元（1860）年1月、長崎におもむき、ポンベに師事し、以後、ボードイン（Antonius Franciscus Bauduin）、マンスフェルト（Constant George van Mansvelt）のもとで

西洋医学をまなぶ。専齋が長崎で出会ったのは、適塾とは異質の西洋医学であった。オランダ人医官は、「きわめて平易なる言語即文章」によって「事實の正味」を説明する。「疑義難題」も医療器機、薬剤、キュンストレーキ (Kunstlijk) などの実物を提示したり、図示したりするために氷解する<sup>26)</sup>。日々の講義を理解し、知識を蓄積すれば、あたらしい知識を吸収し、あたらしい「理」を理解することができる。「一字一章」にこだわることなく、解釈がわかることもない。「字書」は「机上のかさり物」にすぎない。「摘句尋章の舊習」を脱し、ただちに記述内容を把握し、もっぱら「事物の實理」を究明することができる。

長崎のオランダ人医官は、いずれもウトレヒト陸軍軍医学校 (Militaire Academie te Utrecht) の出身者である。オランダは、17世紀初頭以降、植民地を拡大し、貿易圏を整備する。ウトレヒト陸軍軍医学校は、陸軍、海軍だけでなく、植民地や各地の商館に臨床医を供給する役割をになう。同医学校の出身者は、戦場において傷病兵の治療にあたるだけでなく、任地に流行する風土病や伝染病の予防や治療にもあたらなければならない。ウトレヒト陸軍軍医学校は、こうした多様性に対応できる臨床医の養成を課題とする。

西洋医学のながい修学歴をもつ専齋はオランダ人医官の教育方針に共鳴する。ポンペの高弟である松本良順も、緒方洪庵の没後、江戸の医学所の頭取に任じられると、ポンペの医学教育の課程を江戸の医学所において採用する。江戸でも、「蘭學一變の時節」<sup>27)</sup> が到来する。

周蔵は、専齋の「講習」をうける。その内容は、日本において独自に変質し、主流化した宇田川・坪井の学統とは異質のものである。周蔵が、専齋の背後にいるオランダ人医官の方針に異議を申し立てたとしても不思議ではない。周蔵が派遣された、西洋医学の受容拠点である長崎は、「来て見れ者さほどにもなひ富士の山」(6月28日付日野宗春宛書簡) である。

第2に、病院における臨床教育は、周蔵にとっては「吾病院ニ優ルヲ僅ニ一層ヲ加ルノミ」である。「吾病院」とは、元治2(1865)年1月に、下関砲撃事件、禁門の変、萩藩内での内戦における傷病兵や罹患者の治療のために好生堂に付設された病院である<sup>28)</sup>。マンズフェルトは、毎朝、8時から10時までの2時間、「講釈」をおこなう。教室での授業をおえたのち、10時から12時まで伝習生をひきつれ、病室を回診し午後1時から外来患者の診察、治療にあたる。周蔵によれば、病院の入院患者は「二十輩」に満たない。それは、じゅうぶんな臨床経験をつむことが不可能であることを意味する。実際には、精得館の入院患者は「百人位」にもおよび、「二階と下とに餘程室数があつたが、それが一杯であつた」<sup>29)</sup>。

「人身解剖」について、周蔵は、出崎以来、日があさいにもかかわらず、「未タ之ヲ見ズ」と述べている。オランダ人医官マンズフェルトが基礎医学の解剖学を軽視しているような叙法である。元治2(1865)年1月以来、精得館で研鑽する池田謙齋によれば、マンズフェルトは、つねひごろ「解剖をやらなければいけない」と主張し、「人体の細肢図並に画等の掛軸」、人体解剖図の掛け軸による解剖学、「解剖書講釈」、「外科新論」、「外科書講釈」などの



「講釈」をおこなう。ポンペがフランスから輸入したキュンストレーキ、すなわち人体解剖模型も使用する。ロシア軍艦隊の乗組員が精得館に収容され、死亡したときには、「屍体解剖」もおこなう<sup>30)</sup>。

周蔵が医学校だけでなく、病院についても低い評価をくだすのは、オランダ人医官が主宰する長崎精得館でまなんだとしても、「吾道ノ墮廢」を挽回するためには効果的ではないという実態を浮き彫りにするためである。周蔵は、出崎後まもないころ、オランダ人医師やイギリス人医師と面談したさい、「必也可<sub>レ</sub>遠遊<sub>一</sub>也」という回答（6月28日付日野宗春宛書簡）をひきだす。さらに、精得館のオランダ人医官からも「必也遠遊スヘキナリ」という助言をうける。長崎精得館ではなく、海外に留学すべきであるという証言である。

### Ⅲ. 万里異域

萩藩は、戦闘が間断なくつづくなかで軍事に専念せざるを得ない。留学生を海外に派遣するにしても、「兵士」枠から選抜する。萩藩は、文久3（1863）年4月、攘夷実行をまえに、井上聞太、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤俊輔、野村弥吉の5名の留学生を「航海業」の修学のためにイギリスに密航させる。それは、「一旦兵端を開絶交之上にては外國の長技も御採用之思召も難被行届」からである<sup>31)</sup>。帰国後、「海軍一途」にはげむのが、かれらの使命である。萩藩は、慶応元（1865）年4月にも、南貞助、山崎小三郎、竹田庸次郎の3名を「兵學修業并時情探索」のためにイギリスにおくりだす<sup>32)</sup>。鹿児島藩が16名の藩士をイギリスに密航させたのは、薩英戦争後の元治2（1865）年3月のことである。

周蔵が長崎にたどりついたころ、「河北輩洋行被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>」る（6月28日付日野宗春宛書簡）。整武隊軍監の河北義次郎は、「其隊之威勢」により「兵士」のなかから選抜され、長崎に滞在していた。義次郎は、大組士仙蔵の子として、周蔵とおなじ天保15（1844）年に生まれ、明倫館にすすみ、松下村塾にまなぶ<sup>33)</sup>。吉田松陰は、義次郎について、「汝忽<sub>レ</sub>恃<sub>レ</sub>才、忽<sub>レ</sub>玩<sub>レ</sub>年」<sup>34)</sup>、若年で才能があるからと驕ってはならない、とたしなめている。性格的に才気走ったところがあり、物議をかもしもすことも少なくなかったようである。禁門の変に従軍し、萩にもどったのちは、品川弥二郎の干城隊に参加し、元治2（1865）年1月の内訌戦、翌年の四境戦争で武功をあげる。義次郎は、慶応2（1866）年11月、木戸孝允が丙寅丸で鹿児島におもむき、藩主島津忠義父子に謁見し、萩藩主敬親父子の謝状を奉呈したさい、副使として孝允に随従したこともある。

義次郎は、「兵士」枠からの「洋行」である。しかし、「吾百軒余之社中」、すなわち藩医団からは、ひとりも海外留学を命じられたものはいない。周蔵は、それを「因循」と呼ぶ。慶応3（1867）年ころの長崎遊学生は「因循」という言葉を口にした。徳島藩遊学生の長井長義は、「石川は來廿五日御國元出船昨夜川口へ來る由。洋行の志あり、英商船タント號小

使となる。國の頑固にして有司の因循を歎ず。夜酌、皆憤發す。(中略)半七金子を周旋す」と日記に書き記す<sup>35)</sup>。石川という人物は留学を志望するが、藩政府から長崎遊学の許可が得られない。そのために、イギリス商船の小使となり、長崎におもむいたということである。下僕の半七までが石川に同情し、醸金する。徳島藩遊学生は石川の志操を称揚し、一方で藩政府の対応が「因循」であると批判する。

諸藩ともに、軍事力の近代装備化のための支出がかさみ、留学資金を工面するのに苦慮していた。とりわけ萩藩は、慶応元(1865)年以降、大村益次郎の指導のもとで徹底的な兵制改革をおこなう。従来の封建的兵制、すなわち軍役制度を廃止し、銃隊に再編成し、新式施錠銃を導入する<sup>36)</sup>。明治3(1870)年の廃藩置県の際、明治新政府は全国諸藩に銃砲、弾薬等の所持状況を報告させるが、全国258藩が所持する大砲は約6600門、小銃は約37万挺にのぼる<sup>37)</sup>。

周蔵は、藩政府の「因循」をたださなければならない。周蔵は、戦時における「醫」の役割について論じる。

平時ハ論ヲ待タス、緩急事有ルガ如キハ兵ノ強弱、師ノ勝敗此ニ管係スル亦最大ナリ、矢丸ノ雨ヲ犯シ、部伍ヲ叱咤シ、勝敗ヲ取り、死生ヲ決スル者ハ将師ノ任ト雖陣營ニ在リテ健康ヲ救全シ、疾病ヲ療癒シ、死生ヲ決スル者ハ、蓋シ亦醫ノ責ナリ

「平時」には、「醫」の使命は、「疾病」の「療癒」、「健康」の「救全」にある。「人身ノ健康ニ在ル者」は、健全な状態で各自が「天職」を奉じる。「疾病ニ罹ル者」は、快癒が見込めないばあいには「天賦ノ職業」を廃せざるをえない。その「患害」が重篤なばあいには、平癒させようとするれば、「醫術」に依拠せざるを得ない。「緩急事有ルガ如キ」とき、すなわち戦時においては、「醫」は「兵ノ強弱」、「師ノ勝敗」にかかわる。戦場において、「部伍」を叱咤し、勝敗の帰趨にかかわり、死生を決するのは、「将師」の職責である。しかし、「陣營」に駐在し、将兵の「健康」を管理し、「疾病」を療癒し、「死生」にかかわるのは、「醫」の責務である。周蔵は、「野稿一章」の段階では、「醫」の軍事的意義を強調することによって、「醫」を軍事に包摂しようとする。

上書には、「健康」が頻出する。「健康」は、緒方洪庵が創案した用語であるといわれる<sup>38)</sup>。洪庵は、嘉永2(1849)年4月に板行した『病学通論』において、つぎのようにしるす<sup>39)</sup>。

凡ソ人身諸器ノ形質缺ル所ナク氣血ノ循環滯ル所ナク運営常ヲ衛ル者ヲ〔健康〕ゲソンド／ハイドトシ其常ヲ變スル者ヲ〔疾病〕シー／キテトス

周蔵の養祖父周弼は、坪井信道塾において洪庵、川本幸民とともに信道門下の三哲として囑望される。洪庵と周弼は、坪井塾をおえた数年ののち、長崎で合流し、天保8(1837)年に伊東南洋(岡海蔵)と3人で『袖珍内外方叢』を訳述する。周弼は、文久元(1861)年2

月に制定される「好生堂増補規則」<sup>40)</sup>の原案を作成し、基礎医学・臨床医学の履修課程を「三科六目」に整理する。「第一科」についてはつぎのように規定する。

是科は人身平生の法則にして、諸臓諸器の系統及其官能を論ず。健康は常にして、疾病は変なり。常を知らされは、変に応すへからず。則ち医学の本源たり。今、分ちて二目とす。

「健康」(gezundheit)の訳語は、坪井塾では共有されていたのであろう。『病学通論』の四半世紀前の、大槻玄沢の訳著には「疾苦ノ厄ニ罹ル病者ヲ救治ノ康健ノ本ニ復セシムル」<sup>41)</sup>という記述がみられる。「健康」(「康健」)と「疾病」(「疾苦」)を対置させる医学観は、周蔵にもひきつがれる。

周蔵は、慶応4年1月9日付書簡では、「國」、あるいは「國家」という表現を意識的につかう。

方今之時勢今日より往々争乱之世と考候ハ、戰士宜勤レ戦、学徒宜勤レ学、百工須勤レ課業、一朝辺塞之不慮ニ事よせ、廢レ学徒之教育、止レ百工之課業候而ハ、将校之器量自他百般之戦器守具等、期レ百年之後候而も成就之日御坐有間敷、随而往先国家御維持之御目的も難レ被レ為立レ哉ニ奉レ愚察候

萩藩は、西南諸藩とともに幕府軍との戦闘に突入し、いつ終息するか予測できない状況にある。不測の事態が発生したとはいえ、「学徒之教育」を廃したり、「百工之課業」を停止したりすれば、「将校之器量」、「百般之戦器守具」などについて「百年之後」を期すとしても、成就するべくもない。火急の事態とはいえ、「戰士」は戦闘に専念し、「学徒」は学問にはげみ、「百工」はみな「課業」につとめなければ、「国家御維持之御目的」は立ちゆかなくなる。「國」、あるいは「國家」は、周蔵が帰属する萩藩にほかならない。

周蔵は、出崎後まもないころ、軍事優先の藩情を勘案し、「醫」を軍事の一環として位置づける。それから半年あまりすぎると、国家の存亡という視点から、萩藩の将来的な全体像を俯瞰し、「医士」を「兵士」とともに、ひとしく将来をになう「学徒」の範疇に還元する。軍事学や医学をまなぼうという日本人留学生が普仏戦争後のプロイセンの首都ベルリンに参集したとき、周蔵が「一国ノ文明ハ單ニ醫學若クハ兵学ノ研究ノミニ依テ増進スルモノニアラサル」と述べた<sup>42)</sup>ことが想起される。

「国家御維持」という観点からみれば、将来をになう「学徒」に期待せざるを得ない。「医士」も、「学徒」として「遠遊」させなければならない。「西海ノ雄藩薩摩両肥山陰ハ出雲自他北陸ノ諸州」から「醫ノ遠遊スル者」が「十輩」以上もいる。萩藩も医師を海外におくりださなければ、「近隣ノ侯伯」の後塵を拝することになる。将来展望が描けないような多端な日々であるが、「廟堂之各位」、すなわち藩政府要人は、「医之真賞」、すなわち医学の真価をみとめ、「吾技」、すなわち藩医団が職掌とする医学を「軍旅」と同様に「一備急務之一

科」と位置付けなければならない。周蔵は、「一備急務之一科」の担い手としてみずから名乗りをあげる。

願フ官府吾社中ノ一兩輩ヲ拔キ遠遊ヲ許サンコトヲ、雖レ然万里異域ノ遠キ費耗特ニ夥シ、宜シク沈静実着ニシテ他日大業ヲ修メ前日ノ費耗ニ價スル者ヲ撰ハンナリ、然則其責甚タ重ク、其人最乏シ、願ルニ恒徳齒未タニ支ニ至ラス、方ニ春秋ニ富ミ平生讀書ニ勤ム、願クハ執事積年ノ志願ヲ憐ミ、吾道ノ隆起ヲ欲セハ別ニ一人ヲ撰ヒ併セテ之ヲ 君公ニ聞シ共ニ異域ノ遠遊ヲ許サバ、前日ノ費耗ニ價スル能ワザラント雖ト致格數年ノ月日ヲ假ラバ、学聞伎倆其大概ヲ得ベキナリ、言自薦ニ亘リ信偽如何ト謂ワハ、平生ノ行跡巨細トナク坪井竹田及ヒ日野半井等ニ質サンコトヲ懇願ノ至リニ堪ズ

周蔵は、藩医団のなかから「一兩輩」を選抜し、「遠遊」を許可するよう藩政府に請願する。ただし、「万里異域」に留学生を派遣すれば、莫大な費用を要する。「沈静実着」で、のちのち「大業」をおさめ、財政的負担にみあうような人物をえらばなければならない。えらばれた留学生の責務は非常に重い、人材にとほしい。周蔵は、核心にうつる。愚生は、「二支」、すなわち24歳にもみたないが、日々、「讀書」にはげんでいる。「吾道ノ隆起」をおのぞみであれば、愚生の「積年ノ志願」に同情し、「別ニ一人ヲ撰ヒ」、「君公」に推薦し、「異域ノ遠遊」をお許し願いたい。「數年ノ月日」を猶予いただければ、「学聞伎倆」ともに、その「大概」を修得する。「自薦」の妥当性については、平生の愚生の「行跡」について坪井信道、竹田祐伯、日野宗春、半井春軒に問いただしていただきたい。

「野稿一章」に若干の修正がくわえられたとしても、木戸孝允が目をとおし、周蔵の「遠遊」の意図と意思を理解し、「遠遊」を是認したのはたしかである。周蔵のもとには、竹田祐伯から「木戸氏江種々申入候處、引受殊ニ宜敷帰鴻之上、成丈尽力可レ致候と之事」（慶応3年8月18日付書簡）との知らせがとどく。時期的に周蔵が上書を浄書し、孝允に「遠遊」の意図と意思をつたえたのちのころである。

慶応3（1867）年6月8日、養母ミナが病没する。周蔵が長崎にたどりついたのは、同月10日のことである。養母の病状を知りながら遁走したことになる。萩の藩医団からは、「養母遠行仕候よし」をつたえられ、「香行旁一寸帰國可レ仕相決候處」、「木戸」、「青木」、「小川」に説得され、焼香のための帰藩をさきのばしにする。「木戸」孝允も、周蔵の境涯にかかわる。萩藩の長崎遊学生は、天領という制約された環境のなかで鬱屈した日々をすごしていた。<sup>くちばし</sup> 嘴で刺すように中傷誹謗がくりかえされる。周蔵自身も、萩藩遊学生のあいだに生じた人間関係のしがらみに巻き込まれ、「冤罪」を着せられたこともある（慶応3年8月18日付書簡）。藩政の中枢に参画する木戸孝允は、遠藤謹助に長崎遊学生を淘汰するよう命じる。謹助は、イギリス留学の期限をまえに慶応2（1866）年に帰国し、萩藩で通訳の任務についていた。謹助は、慶応3（1867）年1月、杉孫七郎とともに長崎にでむき、第二丙寅丸



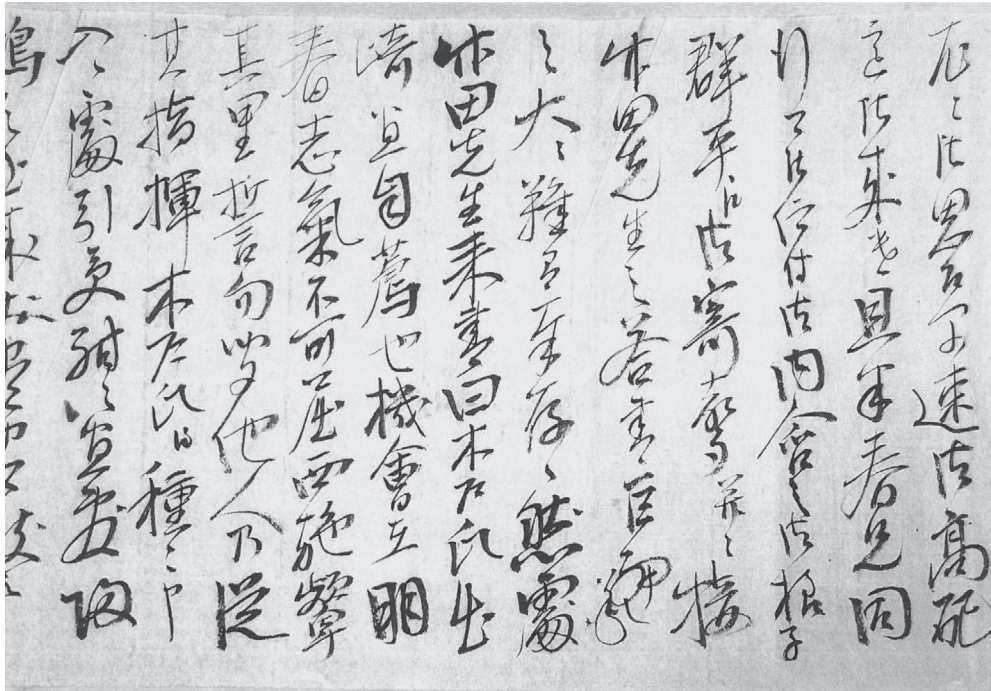


図2 青木周蔵書簡 慶応3年8月18日付

を売却し、砲艦2艘を購入するよう命じられる<sup>43)</sup>。謹助は、しばしば藩地と長崎を往復していた。謹助は、慶応3(1867)年9月、「最早一人モ出崎御許シ無之様奉存候尤青木松岡兩生ハ在留可然候」と復命する<sup>44)</sup>。

上記「青木」は青木群平である。群平は、大島郡地下医であったが、好生堂舎密局御用掛に任じられ、最新のライフル銃の買い付けに長崎にでかけたこともある。謹助にしても、群平にしても、周蔵を長崎にとめおこうと考える孝允の意を体していた。群平は、武器買い付けの功績がみとめられ、慶応4(1868)年8月には「身柄一代準士族」にとりたてられる<sup>45)</sup>。周蔵は、「此身非私物一候」、すなわち藩命により長崎に滞在する公人であるとして長崎にとどまる。

藩医団は、周蔵を長崎遊学生に推薦し、長崎におくりだす。しかし、「遠遊」に関しては、周蔵に藩中枢への「自薦」をすすめる(慶応3(1867)年8月18日付書簡)。その背景には、養父研蔵の存在がある。周蔵は、幾人かの候補者のなかから青木家の養子にむかえられるが、それは藩医や医者としての適性があったからではなく、オランダ語の読解力がひいできていたからである。研蔵は、やがて周蔵が「稟賦ノ醫者嫌ヒ」であることに気づき、日ごろ、医家の後継ぎの心得などについて説諭していたと思われる。周蔵は、長崎に旅だつさい、養

父研蔵から「変業セザル可シ」と諭されていた<sup>46)</sup>。研蔵は、「温厚謹直，細心慎重」な性格で、「勤勉な人」であった。「寡言」で，実兄の周弼のように，みずから理想についてかたるような人柄ではなかった。実際，好生堂教諭職にありながら，「醫政家」としての業績は少なかった<sup>47)</sup>。周蔵は，養父の生真面目さにもものたりなさを感じたであろう。それだけではなく，養子に細々と説諭する研蔵に反感をいただき，「愚父」ともよび，「兼而之小心」と侮る（慶応3年8月18日付書簡）。それは，手極足極として抑圧するものにたいする反発からでた言葉である。

研蔵は，藩主侍医であるだけでなく，好生堂教諭役として萩藩医団を統括する地位にある。周蔵は，研蔵の長女照子の婿であり，青木家の養嗣子にすぎない。しかも，書簡の宛先は第三者ではなく，青木家を師家とする日野宗春である。周防大島の地下医の出である宗春は，周弼の門生であるだけでなく，周弼の口利きにより萩藩医の日野貞庵の養子にむかえられる。青木家の当主である研蔵を公私ともに支える立場にある。宗春は，周蔵の後見人でもある。「志」をおなじくする半井春軒にしても，好生堂助教役，好生堂教諭役心得といった役職を歴任する竹田祐伯にしても，宗春とともに，研蔵を補佐する立場にある。かれらは，研蔵が周蔵の「遠遊」に難色を示していることを知っている。藩医団が藩政府に周蔵を「遠遊」させるよう働きかけることができないのは，研蔵の意向を付度したためである。

研蔵は，周蔵の「遠遊」が現実味をおびてくると，それに反対する姿勢を鮮明にする。研蔵は，慶応3（1867）年9月に日野宗春に書簡をおくり，軍政総掛として藩政の中核的な役割をになう木戸孝允への伝言を依頼し，書状を託す<sup>48)</sup>。

拙も明朝より帰萩今一応相話仕度候処相憎懸違念之至ニ奉存候然は此せつ木戸馬関迄帰居近日之内此元へ帰候よし今日承り申候何卒帰着次第彼方へ御出周蔵外国行之儀ハ不被差免様御伝へ可被下候此状へも其段頼遣申候此中来逐々申上候道心事御憐察被下何分宜しく御頼申候先ハ為其余は帰萩の上方縷可申上候草々頓首

研蔵は，近々帰山する木戸孝允に「周蔵外国行之儀ハ不被差免様」伝言をたのみ，あわせて孝允宛の書簡を託す。「研蔵は養子周蔵を洋行させたく思ひ，その斡旋を日野宗春に依頼した<sup>49)</sup>」わけではない。孝允が数日中に下関から山口にかえることを承知しながら，研蔵はあくまでも帰萩の予定をまもり，山口で孝允を待とうとはしない。

「同行」についても，ふれておかなければならない。萩藩は，海外に留学生を派遣するさいには，単独で送りだすことはなかった。周蔵が海外留学をゆるされるとしても，「同行」がいるはずである。出崎当時，同行者の候補とみなされるのは，松岡勇記のほかにはいない。しかし，勇記は，「医士」仲間ではあるが，「軽薄之處行」が目にあまる。周蔵にとっては，勇記は海外留学の「同行」としてふさわしくない（慶応3年6月28日付書簡）。そのうちに，「半春兄」，すなわち半井春軒が「同行」として浮上する（慶応3年8月18日付書簡）。

年があらたまると、春軒は各地で創傷を負い、萩に搬送される兵士の治療にあたることになり、「同行」が困難になる。周蔵は、藩医団に「獨行」を願いでる（慶応4年1月9日付書簡）。

おわりに

元治元（1864）年7月の禁門の変ののち、萩藩は朝敵となり、幕府の封鎖策により政治的・経済的に孤立しただけでなく、幕府と軍事的に対立することになる。それは、萩藩医学校が文久3（1863）年1月の好生堂改正規則により原書課程を本科とする西洋医学校に再編成された1年半ほどのちのことである。孤立と対立のなかで、藩医団は「吾道ノ墮廢」を認識するようになる。「吾道ノ墮廢」とは、藩医団の拠点である萩藩医学校好生堂における研究・教育の機能の停滞を意味する。孤立は西洋医学のあたらしい研究動向の受け入れの障壁になり、対立は萩藩医学校の医師再生産機能を停止させる。

周蔵は「吾道ノ墮廢」を懸念する萩藩医団の期待を背負い、藩費遊学生として長崎におくりだされる。周蔵に課せられたのは、現代の西洋医学を萩藩に移植し、萩藩医学校を再興することである。周蔵が長崎において書きしるした「野稿一章」や書簡から読みとることができるのは、長崎は現代の西洋医学を萩藩に移植するための修学の間として適切ではないという周蔵の主張である。蘭学者、とりわけ西洋医学を専攻するものにとって聖地であるはずの長崎は周蔵にとっては、「来て見れ者さほどにもなひ富士の山」にすぎない。長崎に逗留する外国人医師の「必也遠遊スヘキナリ」という助言、あるいは証言は、現代の西洋医学を修学するためには、長崎ではなく、「遠遊」しなければならないという周蔵の主張を補強する。「稟賦ノ醫者嫌ヒ」の周蔵にとっては、「遠遊」それじたいが目的であり、現代の西洋医学の移植は「遠遊」を実現するための方便にはかならない。周蔵の個人的な留学願望は、藩医団のなかにおける「吾道ノ墮廢」の認識にむすびつき、藩医の「遠遊」論につながる。「遠遊」は「二州医道之隆起廢壞ニも関係仕候一盛事」（慶応4年1月9日付書簡）にはかならない。周蔵は、萩をはなれ、さらになにもものかに憑かれたように海外へ逃れようとする。「外国行」は、「稟賦ノ醫者嫌ヒ」の周蔵が医家の青木家からのがれ、「変業」を可能にする。海外逃避行である。

明治3（1870）年9月5日、典医として東京に赴任した養父研蔵が事故により死去する。すでにベルリン大学法学部に学籍登録していた周蔵は、同年11月5日に青木家の家督を相続する。明治6（1873）年1月には外務一等書記官心得に登用され、ベルリンに在勤する。明治7（1874）年には青木家から離縁をせまられ、慈父のように慕う木戸孝允から「弟之はごくみ」、すなわち仮の養子である養はぐくみになるようすすめられる<sup>50</sup>。周蔵は、その後も青木家の当主に居座る。明治10（1877）年10月には照子を離縁し、プロイセン貴族の娘エリザベト・フォン・ラーデ（Elisabeth von Lade）と結婚する。周蔵は、ドイツで「国家ニ益スル

学問」をまなび、「政治ニ参与スヘキ位置」につき、「素志」をとげる<sup>51)</sup>。しかし、周蔵は疾しいおもいにさいなまれる。養父研蔵は、とおい過去のなかで封印される。

【註】

- 1) 『青木周蔵筆記』第一, 「青木周蔵関係文書」, 国立国会図書館憲政資料室所蔵。
- 2) 「野稿一章」, 青木周蔵上書, 木戸執事宛, 丁卯季夏, 「田村哲夫文庫」, 「諸家文書」, 山口県文書館。「野稿一章」を発掘・収集したのは, 山口県文書館草創期の専門職員の田村哲夫である。田村哲夫は, 『防長風土注進案』などの復刻事業において中心的な役割を演じる(山口県文書館 HP)。
- 3) 日野宗春談, 伊内左助速記, 「日野宗春翁雑談」, 「毛利家文庫」, 山口県文書館所蔵。
- 4) 浅川道夫, 「翻訳医書からみた幕末の軍陣医学」, 『軍事史学』第49巻第4号, 2014年3月, 5頁。
- 5) 「凡例」, 大槻俊斎訳述, 出版地不明, 出版者不明, 嘉永7(1854)年, 江川太郎左衛門序, 早稲田大学図書館所蔵。
- 6) 阿知波五郎, 近代日本外科学の成立: わが国外科に及ぼしたヨーロッパ医学の影響, 日本医史学会, 1967年, 145頁。
- 7) 浅川道夫, 「翻訳医書からみた幕末の軍陣医学」, 『軍事史学』第49巻第4号, 2014年3月, 10頁。
- 8) 「凡例」, ロウイス・ストロメール著, シュエルマン訳, 佐藤尚中重訳, 『外科醫法』, 岡山大学医学部医学資料室所蔵。
- 9) “Allgemeine Deutsche Biographie”.
- 10) 斯篤魯默児著, シュエルマン訳, 佐藤尚中重訳, 『斯篤魯默児砲痕論』巻1, 嶋村屋利助, 慶応元(1865)年, 早稲田大学所蔵。
- 11) 宮下三郎, 『和蘭医書の研究と書誌』, 井上書店, 平成9年, 120頁。
- 12) 小川鼎三, 「佐藤尚中伝」7, 『順天堂医学』第19巻第3号, 1973年9月, 433頁。
- 13) 同上, 431頁。
- 14) 山口県文書館の小田家文書にも『斯篤魯默児砲痕論』がおさめられる。同文書館 HP によれば, 「小田家は, 旧吉敷村に居を構え, 江戸時代, 吉敷毛利家の医師を務め, 以後, 代々医者として活動した」とある。
- 15) ポンベの後任ボードインも, 『戦場射創論』を講じる。聴講者が筆記したものが浄書され, 「勃度印口授筆記」として, 長崎歴史文化博物館に所蔵される。
- 16) 田中助一, 『防長医学史』上巻, 防長医学史刊行後援会, 昭和28年(聚海書林, 昭和59年復刻), 69頁。
- 17) 『防長医学史』下巻, 45頁。
- 18) 『防長医学史』上巻, 246~247頁。
- 19) 同上書, 248頁。
- 20) 阿知波五郎, 「明治初年地方医学校のオランダ語からドイツ語医学移行の研究——山口県・三田尻・華浦医学校の事例について」, 『日本医史学雑誌』第19巻第1号, 1973年1月, 11~12頁。
- 21) 『防長医学史』上巻, 249頁。
- 22) 『防長医学史』上巻, 78頁。
- 23) 『忠正公伝』第21編, 第7章 長藩士の洋行, 「両公伝史料」, 山口県文書館所蔵。
- 24) 長与専斎, 長与称吉編, 『松香私志』上巻, 明治35年, 30~31頁。
- 25) 池田謙斎口述, 医海時報社員筆記, 『回顧録』, 入沢達吉, 大正6年, 10~11頁。
- 26) 『松香私志』上巻, 30~31頁。
- 27) 同上書, 19~20頁。
- 28) 『防長医学史』上巻, 249頁。
- 29) 池田謙斎, 『回顧録』, 27頁。
- 30) 同上書, 23~24頁。
- 31) 末松謙澄, 『防長回天史』第三編下, 末松春彦, 大正10年修訂再版(末松謙澄, 『防長回天史』四,



- マツノ書店，平成3年），169～170頁。
- 32) 末松謙澄，『防長回天史』第五編上，末松春彦，大正10年修訂再版（末松謙澄，『防長回天史』七，マツノ書店，平成3年），126頁。
  - 33) 河北珍彦著刊，『河北義次郎伝』幕末編，昭和45年。
  - 34) 「河北生に示す」，山口教育会，『吉田松陰全集』第六卷，大和書房，昭和48年，207頁。
  - 35) 慶応3年1月3日，徳島大学薬学部長井長義資料委員会，「瓊浦日抄」慶応丁卯，『長井長義長崎日記』改訂版，徳島大学薬友会出版部，2003年，35～36頁。
  - 36) 藤原彰，『日本軍事史』上巻，戦前篇，日本評論社，1987年，10頁。
  - 37) 南坊平造，「明治維新全国諸藩の鉄砲戦力」，『軍事史学』第13巻第1号，1977年6月，77頁。
  - 38) 杉浦守邦，「『健康』という語の創始者について」，『日本医学史雑誌』第43巻第2号，平成9年6月，251頁。
  - 39) 緒方章訳述，『病学通論』巻之二「疾病総論」，河内屋卯助，出版年不明，早稲田大学図書館所蔵。
  - 40) 「部寄」文久元年，「毛利家文庫」，山口県文書館所蔵。
  - 41) 老楞佐・協乙速の盧著撰，杉田玄白起業，大槻玄澤訳，『瘍医新書』誘導篇，巻之三，文政8（1825）年刊，岡山大学医学部医学資料室所蔵。
  - 42) 『青木周蔵筆記』第三。
  - 43) 『防長回天史』第五編下，234頁。
  - 44) 遠藤謹助（長崎）書翰 木戸孝允宛慶応三年九月十四日，『防長回天史』第五編下，410頁。
  - 45) 忠正公伝 第23編。
  - 46) 青木周蔵書翰，半井春軒宛，明治3年月日不明，『防長医学史』下巻，23～25頁。
  - 47) 「附記 青木研蔵伝」，岡原義二，『青木周弼伝』，大空社，1994年（昭和16年初版，青木周弼先生顕彰会），735～736頁。
  - 48) 慶応3年9月1日付，青木研蔵書簡，日野宗春宛，『青木周弼伝』，707～708頁。
  - 49) 同上書，707頁。
  - 50) 木戸孝允書簡，青木周蔵宛，明治7年9月3日付，日本史籍協会編，『木戸孝允文書』五，東京大学出版会，昭和46年（昭和5年初版），339頁。
  - 51) 『青木周蔵筆記』第一。

## Zusammenfassung

### Ein vulgäre Manuskript

—— Das Gesuch für den Studienaufenthalt im Europa von Shūzo Aoki ——

MORIKAWA Jun

In Nagasaki schreibt Shūzo Aoki einige Briefe an das Korps des Leibarztes, und reicht sein Gesuch an Koin Kido, einen der Führer der Hagi-Regierung ein, um den Studienaufenthalt im Europa zu verwirklichen. In dieser Studie möchte ich durch Analyse seines Gesuchs und seiner Briefe prüfen, wie Shūzo als Nachfolger des Leibarztes seine Gründe darlegt.

